

先生を囲る話

中谷宇吉郎

青空文庫

この話は大正十二年の暮から昭和三年の春までの四年あまりにわたつて、私が先生の下で学生または助手として働いている間に、実験室や御宅の応接間で折にふれて先生から聞いた話を思出すごとに書き留めておいたものを整理したものである。書きかけて見ると何だか少し自分の事もかなり這入りそうで少し面はゆい所もあるが、一方考えてみるとこのような弟子の一人としてみたところの主観も少し混っている話が沢山集つたならば、かえつて先生の全貌をみようとする人に良いデータを供給することになるかも知れない。

丁度この時代は先生が胃潰瘍の大患から恢復されて、再び大学

へ顔を出し始められて間もない頃から始まり、次で理研入りとなつて、さらに地震研究所の専任教授になられ、物理学者として忙なそして多彩な生活に復帰された時代であり、文芸的にも『冬彦集』や『敷柑子集』の出版があつて、先生の隨筆に対する態度が決定的に明かにされた時代である。以下断片的に輯録した先生の話の中には、後に隨筆として書かれたものもかなりあるが、著しい重複にならざる限り一応書き残しておくことにした。先生が応接間で若い連中を前にして語られていた言葉と、それが後に完全な形となつて隨筆の中に書かれたものとの比較もまた一部の読者には興味があることと思われるからである。

一 その頃の応接間

その頃の応接間は現在の姿と別に変つた所はなかつたので、その内部の様子などを詳しく書くのは少し御迷惑なことかも知れないが、これから後の話には、その話が醸し出される雰囲気の説明がかなり重要な要件になると思われる所以、押して簡単な叙景をすることとする。まず壁には色々いわれのある油絵が三枚ばかり掛つていて、その外に先生御自身の描かれた小さい絵が時々取り換えられて一枚ないし二枚位掛けられてあつた。片隅にはピアノが置いてあつて、その上には随分使い汚された楽譜が一杯に積み重ねられていた。今一方の隅には隨筆に書かれた蓄音機が置かれ

てあり、その前には楽譜台とバイオリンのケースとが乱雑に立つていた。外には印度イング更紗の壁飾りと、壺が一つ室の装飾品として置かれてあつた。

部屋の真中には掛心地良い細身の肱掛椅子が卓を挟んであり、その一方に先生が、その頃はよくジヤケツ風なコートを着込んで煙草を吹かしておられたものであつた。夜など少し早めに伺うと、夕食の後らしくバイオリンを弾いておられた。しげしげ伺うようになつてからは先生も大分気安く、バイオリンを弾きながらちょっと頤でしゃくつて椅子に腰を下すように命ぜられて、眞面目臭つた顔付でバイオリンを続けられていたようなこともあつた。そして一節の終りまで行くと「ヤア失敬、失敬」といながらバイ

オリンを無造作に置いて、椅子によりながら卓の上の敷島を一本抜いてニヤリとされるのが常であった。

卓の上にはよく画の本が二冊位載せてあつた。いつか画の話のついでに、その中の一冊を取り上げて眺めながら、

僕は画の本はかなり持っていますよ、今に僕が死んで、僕の遺書が売り物にでも出たらきっと皆が驚くよ。「なんだ、物理の本なんかちつとも有りやしないじやないか。絵の本ばかりじやないか」ってね。描く方も以前は大分やつたが、この頃はちつともやらない。描く暇がないから見るだけで我慢してゐんです。

というような話が出たこともあつた。

この応接間については面白い話がある。ある時妙な発明家がやつてきて、永久運動の器械を発明したからといって、複雑な器械の設計図を持ち込んだことがあつたのである。この器械はちよつと甚だ巧妙な設計になつていて先生も大分悩させられたそうである。結局実際には出来ないような設計になつていたので鳴^{けり}は付いたのであるが、その後大分経つて、ある新聞の小説に永久運動の器械を作る発明家が出てきて、その発明家がある博士を訪問する場面が出てきたのである。

ところが君、その応接間の叙景というのが驚くじやないか、この部屋の様子がそつくり書いてあるんだよ。あれには本当に驚いたよ。

という話なのである。その時には先生が本当に驚かれたらしい表情が出ていていかにも可笑しかつた。

二 フランス語の話

語学の勉強の話が出たことがあつた。

君達もし学者になるつもりなら、英仏独だけは是非要るね、
そしてその中どれか一つは自由に書けなくちゃいけませんね。

君もし仏蘭西語（フランス）がまだだつたら、大学にいる間に少しやつた
方が良いだろう。僕なんか高等学校時代から少しづつ独学で
やつたものですよ。もつとも全くの独学で発音も何も滅茶苦

茶なので、東京へきてから少し発音だけは教わったんだがね。何しろその当時の熊本だから、勿論良い本も何もないのに、仏語独習なんていう良い加減な本を古本屋から漁つてきて一人でコツコツ始めたものです。その次には陸軍の兵隊さんか誰かの使つたらしい古本を探してきてね、それに沢山仮名が付いていたので、それを頼りにしてやつたような仕末さ。それでも結構今は不自由しないよ。

それから伊太利語もその調子でやつてどうにか科学の参考書だけは読めるようになつた。その調子で四、五年前から露西亞語シリアも始めているが、これはアルハベットも違うし、どうも進歩が遅くて閉口したね。それでも止めずに少しづつでも

やつていれば、幾分進歩して行くようだ。この頃は狡くなつてツルゲーネフなどの小説を買つてきて、その英訳と対照して読んでいるが、これはなかなか工合が良さそうだ。今「初恋」を読んでいるが、なかなか面白いね。

何でも僕は一人でコツコツやるということに興味を感じているんでね、何にしても語学は自分でやらなきや駄目だよ。

先生はちよつと言葉を切つて微笑みながら顔を見られる。こうなつては仕方がないので頭を搔いてこつちもニヤニヤしているより仕方がない。先生は上機嫌である。

それから大分後のことであるが、実験室へ這入つてこられた先生が突然、私とY君とに向つて「君達フランス語はどうしました

という質問である。兩人共面喰つて恐る恐る「始めよう始めよう」と思いながらまだつい……」という極めて拙い答弁をしてしまつた。「それでは来週から僕が先生になつてフランス語の講習を始めよう」という爆弾的宣告が下りてしまつた。

さあ大変だということになつて、兩人額を集めて相談の結果、丁度化学教室で学生にフランス語の課外講習をやつていたのを偉い、兩人ともその方へ出ることにしてやつと先生の「講習」を喰い止めてヤレヤレとしたものであつた。

三 コロキウム

この時代から始まつて、後ずつと理研の方で先生の亡くなられるまで続いたものに、「寺田小学校」というものがあつた。この綽名は理研のF君が付けたもので、実は毎週一回午後三時から、先生を中心にして弟子達が皆集つて内輪なコロキウム（雑談会）を開いたのであつた。後にはその都度先生が西洋菓子を買ってこられて、論文の説明がすむと御茶にしながら勝手な ディスカッション
討論や雑談をするのであつた。先生の奇想天外なセオリーや大氣焰の聽けるのもこの時であつて、皆が大変楽しみにしていたものである。

このコロキウムの起りは大正十三年の夏で先生の理研入りの前年であつた。大学の実験室の狭い一部屋で、Y君と私とで水素の

爆発の実験をしていた時のことである。僕らがあまり本を読まなかつたので、到頭先生から三人でコロキウムをやろうといい出されてしまった。論文は何でも良く、長さも随意で、ただし各人勝手な時に勝手な質問討論をして差支えなしというのである。実験室の片隅にやつと木の円椅子を三つ入れる隙間を作つて、一尺に二尺位の小さい黒板を掛けてそこで始めるということになつた。

それでは火曜の九時からということになつて、さて当日少し寝過ぎて大急ぎで実験室へ駆けつけて見ると大変、「御両人揃つたら呼びに来て下さい寺田」といつもの赤鉛筆で紙切れに書いたものが実験台の上に載せてある。Y君ものこのこやつてきて頭を搔くばかりであつた。こんな時でも先生は滅多にひどく叱られるよ

うなことはなかつた。

学校のコロキウムには時々いやに難しくてとても分りそうもない題目ばかり並ぶことがある。そんな時にはこつそり逃げ出して、実験室で紅茶なんか作つて太平樂を並べることが流行つた。いつかそれが先生に見付かつてすつかり油を搾られたことがあつた。

君達コロキウムには出ないんですか、やはりなるべく出た方がいいよ。分らぬと思つても聞いているとその中にきつと何かのヒントがあるもので、それが大切なんですよ。オリジナリティというものは、何もない所から出るものじやなくて、出来るだけ沢山の人のやつたことを利用して初めて出せるものだからね。僕なんか学生時代には特に頼んで一年の時から

コロキウムを聴かして貰つたものだよ。勿論分りやしなかつたが、ためにはなつたと今でも思つてゐるね。

四 デイノソウルスの卵

これもある夜の応接間での話の中の一つである。イルストラシオンに出ていたツタンカーメンの遺物の写真を見せて貰つていた時の話のついでであつた。

今日のタイムスを見ると、例のゴビの砂漠でデイノソウルスの卵を見付けたアンドリウスが、また中央亜細亞アジアへ二年とかの計画で、何百頭とかの駱駝と途方もない人数の人とを引

連れて出かけたようだ。あの辺を人類発生の地とみているらしいので、その遺跡を探すためにあの砂漠をさぐつて歩くのだそうだ。とても日本人には出来ないな。あんな事になるととても亞米利加^{アメリカ}にはかなわないね。金の有る無しにかかわらず、日本人だつたら、たとえ金を出す人があつても、宛もないあの中央亞細亞の砂漠へ二年の計画でそんなものを探しに出かける人があるだろうかな。勿論売名的な男にならあるだろうが、まあ大学教授位の程度の人でそれだけの意氣の有る人がいるだろうか疑問だね。そういえばエベレストの英國の登山隊も相変らず今年もまた計画しているそうだが、これも日本人にはあんな風には出来そうもないな。

オソネスの所へ行つた時、液体ヘリウムを作る処を見せられたが、どうも大したものだつたことを覚えている。こつちの室で液体空氣を作つて、それを次の室へとうとうと流してやつて、まるで水かなんかのようにどんどん使つているんだからな。金のことじや亞米利加にかなわないし、そうかといつてオソネスの所みたいに世界の名物になるほどの事も出来ず、日本ももつと科学に力を入れて本氣でやらなきや、いつまで経つても外国から尊敬なんかされないよ。尊敬されなきや排日などされても仕方がないじやないか、こつちが騒げば騒ぐほど、排斥すべき劣等国民だと思われるだけだ。いくらポンピアンクリームや耳隠しを排斥したつて、日本が亞米利

加から尊敬されるようになるまでは排日は君なかなか止まんよ。そんな事に騒ぐよりも不燃性水素でも作つて見給え、排日なんか一邊に止んでしまうから。

先生は、辞して帰る時、玄関まで送つてこられて、私が靴の紐を結んでいるのを立つて見ておられながら、「デイノソウルスの卵が見付かつたって人間がどうなるというのじやないが、……それだから益々面白いんだなあ」と独言のようにいつておられた。

五 田丸先生とローマ字

先生がローマ字に大変熱心で、始終ローマ字世界に書いておら

れたのは周知のことである。先生はローマ字運動の先頭に立たれ
たようなことはなかつたが、隠れた後援者としては随分力を尽さ
れていたようである。その一つの動機としては、先生の田丸先生
に対する敬愛の心持が重要な要素であつたことは見逃し得ぬと思
われる。ある晩この話が出た。

実際田丸先生のローマ字に対する熱心さには頭が下るよ。

田丸先生が、何もそんなに御やりにならなくてもという人があ
るが、時には僕らでさえ、田丸先生があの半分の熱心さで
も物理の方に向けられたらと思うことがあるからね。しかし
よく考えてみれば、物理の方は後には田丸先生に代る人が出
てくる見込があるが、ローマ字の方は田丸先生を除いては二

度とあのような人を見付けることはまず出来そうもないからなあ。何にしてもあれを兎^とや角^{かく}批評することは出来ない。本当に真剣なんだから。

田丸先生ほどの頭と熱心さをもつてしなくては、恐らくローマ字もこれだけにはならなかつただろう。田中館先生も、これはまた熱心過ぎる位熱心で、時と処の区別なくやられるんで、それにローマ字を使わぬ者は馬鹿だといわぬばかりなんだから少々閉口することもあるが、もつとも先生のは何となく愛嬌があつて人の感情を害するというようなことはないからいい。何にしても青森から帰つてきて、直ぐ停車場からローマ字会へ馳け付けるなんてことが始終なんだから実際感

心してしまう。あの時代の方方が偉いような気がするな、やはり武士道が残っているんだろう。僕なんかとても駄目さ。まず帰つたら一服して、美味しい菓子でも喰つて、ねころびながら画の本でも見て一休みしないことにやとてもまた出掛けるなんていう元気はないからな。

田丸先生が亡くなられた時、先生はつくづくと「これでローマ字の方も随分打撃だろう。僕なんかもローマ字のファンというよりも、田丸先生のファンといった方が適切かも知れないからなあ、もつともこれは冗談だが」と述懐されていたことがある。

この話については、先生が高等学校時代に田丸先生から数学を教わり、それで工科から物理へ転ぜられたという話を附記してお

く必要がある。

六 電車の中の読書

電車の中でも少しづつ本を読む癖をつけると結構読めるものですよ。深川の水産講習所へ通っている間だったが、往復の電車の中でカントのプロレゴメナを到頭読みあげてしまつたこともあるからね。もつともあれは一句が長くてワンセンテンスが一頁近い奴があるんで随分苦しんだものだが。

いつか豊隆か誰かの隨筆を読んでいたら、「僕の知ってる人の中でカントの哲学序説を電車の中で読み上げてしまった

人もある。勿論之は異例に属するものだが……」と書いてあって、あんまり近い所の話だつたんで驚いたよ。今でも電車に乗る時は少し遠廻りしても腰掛けられる車に乗ることにしているが、結局その方が良さそうだ。僕なんか五分や十分早く行かなきやならぬというような用事なんて滅多にないんだからね。

この話があつてから数年後、いつか先生と一緒に電車に乗つたら、いつもの風呂敷包みの中からサンスクリットの本を取り出して、ちよつと私にその表紙を見せながらニヤリと笑つてまた急いで包みの中へ藏われたことがあつた。

七 初めて伺つた時

初めて先生の所へ伺つたのは、ニウトン祭の会計報告の時であつた。ニウトン祭というのは東京の大学の物理教室で、毎年十二月二十五日のクリスマスの夜、先生方先輩学生が集つて、漫画の幻灯や御寿司の立喰いなどで一夕打ちとけた懇親の会をするのである。その頃先生はニウトン祭の会計を受持つておられて、毎年余つた金は先生の名で貯金しておいて戴くことになつていた。実際の会計事務は学生がやるので、先生は先生達方面の寄附金を集めて下さることになつていた。そんな随分御迷惑な仕事を先生は案外機嫌よくやって下さつていた。その年は私が学生方面の会計

をやらさせていたので、ニウトン祭の翌日の晩、会計簿と残金とを持つて先生の御宅の応接間へ伺つたのであつた。その時先生は、「どうも毎年、五月か七月頃になるまで会計が出来なかつたものだが、君のは馬鹿に早いね、僕は本当は、几帳面なのが大好きなんだ」と大変御機嫌が良かつた。

ゆっくり話して行き給えといわれるままに、初めて見ることの応接間を、田舎出の大学生らしく物珍しげに見廻しながら、色々の話を聞いて驚いていた。大分遅くなつたようなので御暇いとましようと思つて、「先生は御忙しいんでしようから」と月並なことをいう。何に、良いさ、もう御休みになつたのだから何も忙しいことはない。始終忙しい忙しいといつてはいるのが現代人の欠陥

だ。中には忙しいということが何か偉い事のように思つてゐる人もあるが、僕なんかその反対だね。君、家はどこだね。何、本郷か、それじや電車がなくなつても平氣だね。僕なんか夏目先生の所へ遊びに行つていた頃は、牛込から弥生町まで歩いて帰つたもんだ。いわゆる、「寒月」が皎々と冴え返つてゐる中を歩いて帰つたものだよ。

といつて先生はニヤリとしておられた。

それから二、三日してまた何か用事を見付けて団々しく伺つてみた時、先生は前の会計簿を持つて出てこられて、「君この会計の計算が間違つているよ、一円余計に金を受取つていることになつてゐる」といつて一円出されたのであつた。何思わずそうでした

かといつてそれを受取つて鰐口の中へ入れると、先生は

そうあつさり受取つて貰うと大変難有い。僕はまたもし君
がそれは商人の間違いだらうとか何とかいつて受取つてくれ
なかつたらどうしようかと思つて随分気にしていたんだがね、
そういう点は現代式の教育の良い点なんだろう。

といわれた。こんな事を褒められたのは實に意外だつた。

八 隨筆の弁

初めて伺つた時に聞いた話にこんなのがある。

僕みたい絵も描きたいし、音楽は好きだし、それに変なも

のも書きたいし、こんな道楽者は物理なんかやるんじやなかつた。もう断然何も書くまいと決心していても、雑誌社の人などは実に根気よく頼みにくるし、それにあまり頼まれると氣の毒になる性質だから、つい書いてみる気になつてしまふんだ。それに、ちょっと小使いにもなるからなかなか工合の良いこともあるね。夏目先生が『猫』の最初の原稿料だつたか、二十円位はいつてきたことがあつたが、先生あぶく錢がはいつたのでとても嬉しくてどうしようかと色々考えた末、丸善かどこかへ出掛け行つて、水彩画の絵具一式と、ワットマンか何かの引き裂くと絵葉書になる紙を綴つたのを一冊と、それから象牙の紙切ナイフとを買ってこられたことがあ

る。きっと平生から欲しいと思つておられたものを買ってこられたんだろう。ちょっとそういう気になつて楽しみなものだよ。まだ原稿料で生活の方を何とかしようというほど家計も困つていなし、またそれほど堕落もしていないが、ちょいちょい不意のあぶく銭が入ると、ちょっと都合の良いこと也有つてね。

こんな時にはちよつと気まり悪そうにして独特の微苦笑を洩されるのである。これが初めて御宅へ伺つた学生の一人へ話される言葉なのである。

実はそれに僕はこう見えても科学普及ということにもかなり自信を持っているんだ。この頃の科学何とかという雑誌や

本のような趣味の低いものでは、とても駄目だ。僕は科学的に考える方法というものを見つめることをかなり注意して書いているつもりなんだ。だから僕の本などは極少数の人だけがアツプレシエートしてくれればそれで良いのだと思つている。

九 パブロワの踊り

いつか名人の話の出たついでにその頃初めて東京へきて騒がれていたパブロワの踊りの話が出た。

実は朝日の記者に誘われて二人で出掛けたんだがね。目的は力学的に見たパブロワの踊りというのを書くつもりだ

つたんだからちよつと凄じいだろう。ところがどうも一度ではなかなかいかん。もう一度と思つたが、入場料が非常に高いのでどうしようかと考えた。結局原稿料で埋め合せれば理由はないと思つて到頭二度見たよ。

やはり重心の動き方と脚の運び方で、力学的に安定した時が、見た目にも落付きがあつて美しいと思った、踊りはなかなか複雑だが、重心の動き方を見ていると、案外簡単なりズムから出来上っているものだということが分つて面白かつた。雄弁家の演説というものが丁度あれだね。

それで結局その話は何に御書きになりましたかと聞いたら、

「到頭書かなかつたよ、まるまる損をしたわけさ」と顔一杯皺だ

らけにして大笑いをされた。

一〇 物理学序説

ある晩の応接間の話で、この日は先生は大変機嫌が良くて、大氣焰を揚げられたのであつた。

どうも日本人はあまり夢を持つていなくていけない。それだからいつまで経つても外国人の跡ばかり追っているのだ。「何とか効果」というようなものが発見されると、そのディテイルを細かく精確にやる人はいくらでもいるが、そしてそれも大事なことではあるが、肝心の本当に新しい事実を発

見するようなことを試みる人が少い。X線でも、放射能でも皆最近の発見なんだ。君達は、あんなものはもうとつくに見付かつていていたような気がするかも知れないが、その発見の當時を知つてゐる僕達にはごく新しい事だ。まだまだあれ位の事は沢山どこかに転つてているような気がしてならぬのだが。この頃のような方向に原子論が発達すると、電子と水素核プロトンとで何もかも説明出来てしまふような気持を皆に持たせてしまつていけないね。（註、この話は約十年前のことで、今の中性子や陽電子のことは誰も夢にも考えなかつた頃の話である。）電子のことも水素核のことも分り、光も全波長のものが分つてしまつたらもう自然界にはそれ以上かくされたものがなく

なつてしまふような気になるのが一番いけない。まだまだそれ位のものはいくらでもあるよ。

僕はファラデイのような物理学を想像して学校へはいったのだが、失望したね。物理なんかちつとも教わりやしない。まるで数学ばかり教わつたんだ。物理の数学中毒という論文を一度書いてみたいね。もつともそんな事をすると四方に差し障りが出て困るんだが、僕だつて数学が不要だなんて決していいやしない。数学は物理の研究にはなくてはならぬ精銳な武器なんだが、どんな良い薬だつて、あまり使い過ぎると中毒するものだから、僕はその中毒のことをいつているのだ。しかしそんな勝手な熱ばかりあげてさっぱりやらないうから、

数学の方はどんどん忘れてしまうね。この頃は三角の公式まで思い出せぬことがある位だから、これじゃ困るね。

数学がこんなに幅をきかすというのは、要するに学校教育というものがいけないのだと僕は思っている。今の学校教育といふものは、あまり組織立てることばかりに一所懸命になるからこんなことになつてしまふんだ。教育は何といつても昔の塾教育に限るようだね。僕はその中物理学序説というものを書くから、今はとても忙しいし、それに差し障りがあるといけないから、今に六十になつて停年になつたら一つそれを書いて、大いに天下の物理学者を教育してやるつもりだ。

この話をきいた時は、先生珍しく気焰を揚げられた位に考えて

いたのであるが、亡くなられてから、この物理学序説の原稿が発見されたのである。それは海洋物理学の講義の草稿らしいフルスカットの裏に書かれたもので、百何十枚があつた由である。その初めに予定らしい数字が書いてあつて、それで見ると約三分の一位は出来ていたようである。この原稿は先生の亡くなられてから、岩波のK君が全集のための未発表の原稿を探している中に、先生の書斎で発見したもので、その校正を見せて貰つて初めて驚いたのである。これが完成されなかつたことは實に惜しいのであるが、これだけでも世に出たことは望外の喜びである。

一一 人類学の一つの問題

これも応接間での講義の一つである。私の弟が人類学をやつていたもので、その話の出た時のことである。

人類学のような学問をやる人が我が国には少いので困るのだ。もつと沢山やる人があつて、あのような学問がどんどん現代科学に コントリビュート 寄与するようになるとよいのだが。人類学といえば僕は一つ面白いアイデアを持つてゐるからあげよう、やつてみたらきっと面白いだろうと思う。

今度の大地震なんかで土地が隆起したのは事実だが、古い時代でもこんな地震があつて、そのセンスが同じであつたかどうか、少くとも第三紀以後の大地震帯の活動は同じセンス

であるか否かということは大問題なのだ。それを見るのに貝塚やその他の遺跡の分布を見たら面白いと思う。例えば貝塚の同じ時代のものが巧く海岸線と並行に近い線の上にのつていたら、地震ごとに土地の隆起が同じセンスに起きたことが分り、それと今度の地震のくわしい隆起の図と比較して見たら面白いだろう。歴史時代になつてからは大分よく分つてゐるし、地質年代の事もかなりよく分つてゐるのだが、丁度その連鎖に当る所がまるで分つていないので、そんな方面へ發展させたら、人類学も大分広い野フィールドがあるだろうと思つてゐる。それで未だ足らぬ所があるには決つてゐるが、そこは言語学や、出来たら神話などを調べたら大分補足出来やしないか

という気がする。例えば地名のアイヌ語源のものの意味を調べたり、竜が火を吹くのは火山の噴火だという風に解釈して補つてみるのだね。もつとも木村鷹太郎のようになつても困るが、あれだつて一面の真理はあると思うよ。

一二 地震と○○村

地震の話ついでに、I先生が○○村が東海道で一番地震には安全な所だから別荘を作るならあそこに限ると講演されたところ、あそこは□□□□の村だという手紙がきたという話を持ち出した。先生は言下に「そりやあ当たり前の事だよ」といわれたので、何の

事が分らず「へえ」と曖昧な返事をしておくより仕方なかつた。

君、そりやあ別に驚くことじやないじやないか。日下部さんが「文明と地震」という論文を書いたことがあつてね、文明の起る所というのは大きい河の河口とか、港すなわち海岸線の屈曲の多い所なんだ。そんな所は地盤に裂罅の多い所なんだから、文明都市が地震に脅かされるのは当たり前のことさ。

その逆で四方山で囲まれたような不便な所は地盤がしつかりしている。□□□□の人々が文明都市から排斥されてだんだん逃げて行く所は○○のような辺鄙な所、すなわち地震に對して安全なわけだ。それは決して不思議なことではない。僕にとつてもつと不思議なことは、同じ日本人でありながら、

ある職業の人々を□□□□だなんといつて特別の取扱いをすることだ。

一三 名人

誰かが今世界で一番偉い男は、カイゼルとチャップリンだといつたことがあるね。カイゼルの方はもつとも今は面影もないが、チャップリンの方は偉いね。道化た真似でも、あれだけになると必ずその中に何か本当のものを捕えている。どんなことでも、本当のものを捕えている以上、そいつはなかなか真似の出来るものじやないんだ。例えば一平とか、小さんと

かいう男は、大学教授なんていう男と較べたらまるで問題にならん位偉いね。大学教授なんていうのは一番間の抜けた仕事で、気の利いた人は決してやらぬ仕事だね。いつか小さんの落語を聞いたことがあるが、何か本当のものをつかんでいるという気がした。あの前座に出る者なんかの話は全く *inhale* なんだ。まるで内容がないからあんなことになるのだね。君達機会があつたら、何でも良い、名人といわれる人の芸は少くとも一度は見ておいた方が良いよ。

一平の漫画は、あれは頭で描くのだ。だから何か本当のものがある。一平の真似をしてこの頃沢山描いている連中がいるが、まるで内容がないね。ずっと落ちてしまう。やつぱり

何でも真似をしてはいかん。漫画だつて、オリジナリティがあつて始めてある意味が出てくるんだね。もつともあの男は特別偉いんだ。この頃大臣のメンタルテストというものを出しているが、あれなんかも実際に思い切つたことをどんどんきいているね。大臣なんかまるで眼中にないという様子だよ。あんなのに較べたら大学の教授なんていうのは駄目だな。もつとも大学の教授だつて偉い人も沢山あるんで、僕みたいな男と較べたらという意味だよ。誤解しちゃいかん。

一四 影画の名人

名人といえば、僕は影画の名人の芸を見たことがある。僕が仏蘭西^{フランス}にいた時、巴里^{パリ}の一流の寄席で、手で影画を作つて見せる男がいたが、実に巧いものだつた。
先生は片手をぐつと突き出して、犬の頭の恰好の影を作つて見せながら

こんな工合に、ただ何の仕掛けもなく、犬の頭を作るんだがね、それが実に不思議なんだ。パンを持つて行くと嬉しそうにしたり、怒つたり、吠えたり、影が君色々の表情をするのだから実に巧いものだつた。こういう工合に両手で猿を二匹作るんだが、それが頭を搔いたり、足を撫でたり、相手の蚤をとつてやつたりするところまで出るんだから全く驚いた

よ。

それから僕が後で紐育^{ニューヨーク}へ渡つてから、やはり一流の寄席へ行つてみたら、またその男が出てきたので驚いたね。どんなつまらぬ事でも名人となると、それで世界を立派に押し渡ることが出来るものだとつくづく感心したよ。光源はポイントライトで、アークか何か使つて向うの幕に写すだけで、あとは手だけ持つて行けば良いのだから簡単さ。

最後には、書割りの家があつて、亭主が酔っぱらつて帰つてくるとお神さんが二階から水をぶっかけるという喜劇をやるのだ。それが済むと、指を開いて見せるのだが、亭主とお神さんとがバラバラと五本の指になつてしまふのだが、あの

時は実に妙な気持になつたよ。

一五 本多先生と一緒に実験された頃

先生は大学を出られて間もない頃、その当時まだ東京の大学におられた本多先生と一緒に磁気の実験をしておられたことがあつた。漱石先生の『猫』の中で、寒月君が首縊りの力学の講演の稽古に乗り込んでくる所で、迷亭が「所がその問題がマグネ付けられたノツヅルに就いて杯という乾燥無味なものじやないんだ」という条りがあるが、実際は先生は、本多先生と一緒に実験された頃は非常に面白かつたようであつた。ただ本多先生があまり猛烈

に勉強されるので少々辟易の氣味であつたらしい。

何にしてもあの地下室で、毎晩々々十二時過ぎまで頑張られるのには弱つたよ。僕はまだ新米で助手なんだから、本多さんが実験をしておられるのに先に帰るわけにも行かず、毎晩一緒に帰つたものだ。勿論門はしまつていたがね、本多さんは決して塀の隙間から出るなんていうことはしないので、いつでもあの弥生町の門だが、ちゃんと門番を叩き起して錠を開けて門を開かせて帰つたものだ。門番は睡いので初めの中はブツブツいつていたがね、何しろそれが毎晩のことだから半年も続いたから、流石さすがの門番もすっかり感服してしまつて、しまいには、「どうも毎晩御勉強で、御疲れでしょう」

と挨拶をするようになつてしまつたものだ。

丁度秋の頃で上野では絵の展覧会があるのでそれを見に行く暇もないのだ。僕は昔京都へ行かないかと勧められた時に、どうも家の都合もあつて断つたことがあるが、その時には、「寺田は絵の展覧会が見られないからといって京都を断つたそうだ」という噂が立つた位だから、あれは實に苦痛だつたよ。本多さんときたら土曜も日曜もないのだからね。ところが丁度十一月三日の天長節の朝さ、下宿の二階で目を覚してみたら、秋晴れの青空に暖かそうな日が射しているじゃないか。有難い、今日こそ展覧会を見に行こうと思つていいそと起きて飯を喰つていると、障子を開けて這入つてくる

人があるんだ。見ると本多さんさ。「今日は休日で誰もいなくて学校が静かでいいわな、さあ行こう」といわれるんだ。あんな悲観したことはなかつたよ。実にやり切れなかつたよ。私は思わず吹き出してしまつた。先生も珍しく大声を揚げて笑い出された。しばらくして先生は真面目な顔になつていわれた。

しかしあの頃の実験で僕は一つ大事なことを会得したよ。

それは必ず出来るという確信を持つていつまでも根気よくやつておれば、ほとんど不可能のように思われたことでも遂には必ず出来るというのだ。そんなことが物理の研究の場合にもあるとは思われないだろう。しかしそれがあるのだ。これはちょっと唯物論では説明出来ないな。本多さんときたら少

し無茶なんだ、機械の感度からいつても、装置の性質からいつてもとても測れそうもない事でも、いつまでもくつついでいるんだ。そうしていると、どこを目立つて改良したといふこともなくて自然に測れるようになるのだから実に妙だよ。あれは良い経験をしたものだな。あの時使っていたデイラトメーターなんか随分無茶なものだつたが、あれでよく測れたものだつたなあ。

一六 ガリレーの地動説

人間の性質の中には、どんな大学者にも必ず人間味がある

もので、恐ろしい罪人と立派な学者とが一緒にその中に棲んでいるものだ。結局その中のどちらが表面に出るかによつて決まるのだ。それだから僕は偽善者は大嫌いだ。その他の人間ならどんな人間にでも必ず何か取りえがあると思つてゐる。そのつもりで見ると必ず何か取りえがあるから妙だね。ただどうしても僕は偽善者だけは好きにはなれない。実際人間味のある可憐な人々の失策ばかりとりあげて、いわばその at the expense of でね、それで自分の地位を保つたり、あるいはそれを厳しくいい立てることによつて自分が立派な人間であることを人に証明しようとする道徳家連中位癪に障る者はないよ。こんなことをいうと、危険思想だと思われて、寺田

君の説によると泥棒をする人が善人なんだからと時々冷かさ
れることがあるんだ。

ガリレーが宗教裁判で、「自分は地球自転説を捨てる、し
かし地球は廻っている」といったという説に対し、この頃、
それはガリレーが腰を抜かして目を廻し「ああ廻る廻る」と
いつたのだという説を出した人があるが、僕にはこの後の説
の方が本当にガリレーの偉さを示していると思われる。初め
のではちつともガリレーに同情することが出来ない。まるで
芝居を見ているような気がして、ちつとも人間らしい所がな
いじやないか。腰を抜かした所に、それまでのガリレーの内
心の苦悶も見ることが出来るし、当時の世の中の空氣も分る

し、それでこそガリレーが益々偉く見えてくるのだ。これは喜劇のようみえて本当は大変な悲劇になつていると少くとも僕にはそう見えるな。

ネーチュアに、シユスターが色々の物理の大家に会つた時の印象記が出ていたが、あれも面白かつたな。毎号楽しみにしていたものだ。あの印象記には實際その大家の先生の人間味が出ていた。なるほどやつぱり吾々と同じ人間であつたかと分つて非常に愉快だつた。

一七 筆禍の心配

先生と漱石先生との関係は、隨筆「夏目漱石先生の追憶」の中にある通りである。ある晩のこと、やはり曙町の応接間での話であるが、その日は珍しく最初から漱石先生の話が出た。色々追憶の中にあるような話があつた末、漱石全集の話が出た時のことである。

漱石全集の手紙のことについて色々事件があつてね。森田君なんか全部出してしまえというし、そのため迷惑する人があつて困るしね。あれでも実は随分迷惑に思つている人もあるんだからね。それにあの雑録や日記の中にはまだ出してはないが、かなり大変なこともあるんだ。森田君なんか、何でも関わらず出してしまえといつたが、つまらぬことで筆禍になかま

つてもつまらぬから僕なんか大いに止めたわけさ。僕はこれでも官吏だからね。

実際書きつけていると、段々図々しくなつて、思い切つたことを書きたくなるので困るよ。口でいつたことなら、何をいつたつてかまわないが、筆で書いたものはどんなつまらぬことでもやかましくて、實際馬鹿らしい目にあうことがあるからね。君なんかも今に何か書くようなことがあつてもそれだけは注意し給え。

実は今度の議会を見てきて、議会見物記というのを書こうと思つたのだが、丁度書き上げた時、武藤山治とかいう人が「議会は最も能率の上らぬ機関だ」とかいつて懲罰になつた

ということを聞いて、怖くなつたから止めてしまつた。僕が死んで遺稿でも整理する時があつたら出してくれ給え。実際、あんな不愉快な所はないね。バントラとかいう人が、まるで何やらちつとも分らぬことをいつて、手を振り廻して無暗と怒鳴つているし、政友会の方は、また厭に落付いて、何といわれたつてどうせ多数決できめるんだからというので図々しく平氣で構えているし、實際あんな不愉快な所はないよ。

一八 水産時代の思い出

先生は大学を出られてしばらくして、水産講習所へ講義に行つ

ておられたことがあつた。その頃手をつけられた水産方面の色々の問題が、その後優れた後継者達の手で立派な水産物理学となつて、今日日本の水産の技術と同様、立派に世界に覇を成しているのである。初めの中は先生一人で講義も実験もやつておられたのであるが、段々忙しくなつたので、F先生を連れて行つて講義だけを担当して貰われ、先生は研究の方に専念されるようになつたのだそうである。先生はその当時の仕事がよほど御気に入ついたらしく、随分懐しそうにその頃の思い出話をされたことがあつた。

あの頃は面白かつたよ。F君が講義を受持つてくれたので、僕は安心して自分の勝手なことばかりしていたんだ。何しろ

F君の講義というのが振つていてね。「世に物と事とあり、物とは何ぞ、例えば幽靈は物なりや否や」という調子なんだからね。おそらく物理の講義の中に幽靈が出てくるなんていうのはF君だけ位のものだろう。

F君は学生時代はおとなしい若い学生で、あんなに偉くならうとは思つていなかつた。しかし一緒に水産講習所へ通つていた時の電車の中の話は面白かつた。エントロピーが増す一方だというのは可笑おかしい、仏教の御経の中に何とかいう文句があるが、あれはエントロピーが減ることを意味しているなどという話なんだ。どうも少し変つてていると思つていたが、到頭ノルウェーで出したあの有名な渦ホルテックスの論文の中の根本概念

はやはりそこにあつたのだ。

研究の方も面白かつたな。僕は縄の腐れる理論をやるし、F君は乾物の理論、缶詰の理論を出すという始末さ。何でも干鰐を作る話なんだが、肉を纖維の集りとしてその中を毛管現象で水分が上つて行つて、表面から蒸発するというのを、何十頁か長い数式ばかりで埋めたんだから、水産講習所の連中を煙に巻いたわけさ。

もつともこれは冗談じやないんだ。僕はあの縄の腐れる論文には大分自信があるんだが、誰も読んでくれぬのだ。あんまり変つたことをやるのはやはり損だな。

一九 雲の美

大正十三年の夏は大変な暑さで、夏休み中実験室へ出てはいたものの、実験なんか勿論何も手にはつかなかつた。それでも先生は毎日のように実験室へ顔を出された。まず朝室へはいると真裸になつてその上に白い実験着を着て、紅茶をわかして、手製の硝子細工の冷却器に水道の水を通して冷しておく。昼頃先生が見えると、それにうんと砂糖を入れて出すのである。ごみごみした実験台の上で、先生はいかにも汚なさそうにその紅茶をとりあげながら実験結果の曲線を覗かれる。「うん、そうか、これを皆集めて三次元的にすると、金屏風に山の芋を立てかけたような形にな

るんだな」という風な指導振りが一応すむと、後は暢気な雑談をしばらくして帰つて行かれるのであつた。

ある日丁度先生のおられた時に、気象台のF先生が這入つてこられた。何でもF先生が見られることになつていた論文を見終られたので、それを持つてこられたのである。小使にでも持たせて寄こされれば済む所を、わざわざ御自身で持つてこられるのは、F先生も寺田先生に師事されていたからなのである。

「実際こう低タイフーン気圧に腰を据えられては全く神経衰弱になつてしまします」とF先生がこぼされる。先生はニヤニヤしながら、丁度その日の朝の新聞に出ていた記事のことを話されるのであつた。「F君も、ああでもなかつたが、気象台へ行くと、皆人が悪

くなるからね。新聞記者を操縦する所なんか巧いものだ。」

「ええ、なかなか新聞記者学を卒業するには、十年はかかりますね。今頃になつてようやく、そのこつが分りましたが、I先生なんかまだまだ一年生ですね。」

「何だがこの前なんか、中央気象台のF博士に会つて、雲の美の話ををして下さいといつたら、雲の話なら僕も少しさは知っているが、雲の美となると、どうも大学の寺田先生でなくちやとおつしやいましたからといって、婦人記者が僕の所へやつてきたね。実際F君も人が悪いなあ。物理学者を侮辱していると少々憤慨していた所なんだ。」

先生は僕達の顔とF先生の顔とを等分に眺めながらニヤニヤし

ておられる。F先生は頭を搔きながら、

「どうも婦人記者には一番困ります。雲の美、雲の美といつて、いやに美しがつてばかりいるもので、これじゃとても僕の手には負えぬと思つて先生の所へ差し向けた理由なんです。」

といつて、大笑いになつてしまつた。

F先生が辞して帰られようとした時、硝子戸ガラスに、バラバラと雨がかかる「やあしまつた。傘を持って来なかつた。洋傘のいらぬのがありませんか」とF先生がまた頭を搔かれた。これは早速その年のニウトン祭の漫画の幻灯の種になつてしまつた。

二〇 全人格の活動

同じ実験室でのある他の日の話である。少し実験が面白くなつて先生も頻繁に実験室へ顔を出されていた頃のことである。ある日先生が見えている所へ、I書店の主人があの野趣に富んだ精悍な顔を不意に見せたことがあつた。一言二言挨拶をしておられる中に、「どうです、この頃はちつとも御書きになりませんなあ」という申し出であつた。先生は少しきまりの悪そうな顔を私達の方へ向けながら「何分御覧の通りの始末ですよ、これでもなかなか忙しいんでね」と実験の装置を指差される。「それはそうですが、それだけでは寺田さんの半分だけですね、全人格の活動

とはいえませんな。どうかもう一方の半分の御活動も願い度いものですね」と言い棄ててIの主人はさつさと帰つて行つてしまつた。

後で先生は苦笑しながら、

どうも驚いたな。あれが精一杯の御世辞なんだから。しかし全人格の活動とは巧いことをいつたものだ、実はそれが本当なのかも知れないからな。何にしてもこれはIの主人にしちや出来過ぎだ。ことによると道々考えてきたのかも知れないな。

こんなちよつと人の悪いようなリマークをされる時は、先生は全くの上機嫌なのである。

二一 実験の心得

その頃の実験室は生地むき出しの汚いコンクリートの建物の中の狭い一室で、二間に三間位の極めて狭い部屋であつた。その中でY君が水素の爆発をやり、KM君が霜柱を作り、HM君が熱電気の研究に焰を針金に吹きつけ、片隅で私が電気の火花をパチパチ飛ばすというのだから、まず玩具箱をひっくり返したような騒ぎである。その中で先生は悠然として朝日を吹かしながら、「こんなに雑然としているようでも、これらの題目が皆僕の頭の中では一つに融合しているのだからな」といつて、済まして気焰を揚

げておられた。

時々は前にいったような珍客が晴れやかな空気を持ち込んでくるようなこともあつたが、時には先生が真顔になつて実験の心得を説かれることがあつた。

装置を一度作るとどうしてもその通りを追つて行くのが一番楽で、どんどんそれを変えて新しく実験を進めて行くのが何となく億劫になつて、次の事に手を出し兼ねるようになつてしまふ。それが実験家には一番いけないことだ。

型に嵌つた実験を精密にやつて、恒数を決めて行つたりする仕事も僕は決してつまらぬとはいわない。それも立派な事で、またなくてはならぬ仕事であるが、それにはそんな仕事

に適した人があるから、その人に任かして僕は御免を蒙ると
いうだけなんだ。僕は子供の時から家で非常に大事にしてく
れたもので、自分の好きな事だけしてこられた。まあ、苦学
力行の正反対で楽学の大家だね。しかし世の中には自分の好
きな事をやるというのが何か悪い事のように思う人があるの
で困るよ。どうも日本人には、自分の性質に合わぬむつかし
い事をひどく尊敬する癖があるようだ。自分の性に合わぬ事
に大変な勉強をしてやつと人並位の仕事をして得意になつて
るのは、征服感の満足だということに気が付かないんだね。
まあ自分の好きな事を暢気にやつて行くのが、少くとも身体
には一番良いね。

しかし、実験家として立つて行くには、決して億劫がつてはいかぬ。どんなつまらぬ事でもやつてみなければ分らぬものだから。まずやつてみることが一番大切なんだ。頭の良い人は実験が出来ぬというのもそのことで、あまり頭の良い人は何でも直ぐ分つてしまつたような気がするのでいかんのだ。どんな事でもやつてみなければ決して分るものじやない。何といつても相手は自然なんだから。

先生は窓越しに青空を仰ぎながら、ゴソゴソとポケットから煙草を探り出して、「実験物理学者になるには、自然をよく見ることが必要だ。一つルツソウの真似をして、自然に帰れとでも皆の前でいつてみるかな」と感慨深そうにいつておられた。

二二 ボーアの理論

この話は物理を専門にしておられぬ人には興味が少いかも知れないが、その代り物理の専門家の人にはある意味で非常に興味のある話かも知れない。

この頃のように量子力学が非常にむつかしくなつて、物理をやつしていくもその方面的専門家でないとちよつと理解出来ないようになつてくると、この先物理がどのようになつて行くのか少し気懸りになる。

しかし新しい理論というものは、どれも出た初めは大変難しく

見えるもので、今では皆に親しまれているボーアの原子構造論でも、出た初め頃はなかなか大変だったのである。次の話は、長岡先生や寺田先生などが、その理論をめぐつて色々議論をされた席の話である。東大の物理では、毎月一回、御殿で懇親会というのがある。それは先生方、在京先輩、三年の学生が集まつて一円の夕食を共にし、引続いて誰かが、新しい物理学上の問題について一席話をするのである。

六月のある晩のこと、長岡先生が新着のボーアの本を紹介され、その頃では破天荒に新しいボーアの原子論の大体を約一時間にわたつて話されたことがあつた。もつとも定常軌道のことや、プランクの量子論の導入の問題は、その前から知られていて、先

生方も十分考えておられた問題なので、話が済むと直ぐ 議論^(ヨン) が始まったのである。まず寺田先生が、「電子が次の軌道へ行く時^(ニューリー)が^(ニューライ) ネ^(ニューライ)の光で、それを飛び越えてまた次の軌道へ行く時には^(ニューライ) ネ^(ニューライ) の光を出すとすると、何だか電子が自分の行先を知つていて、それに相当する波長の光を出すような気がしますがね」と例の悠揚迫らぬ姿で質問とも独り言ともつかぬ話をされる。あまり妙な質問なので長岡先生は本を撫でながら苦笑しておられる。すると横から佐野先生が飛び出して、「君、それはね、それは」と言いながら黒板の前へ出て行かれて、「電子はね、この途中は飛び越してこの軌道の所へきてしばらくまごまごしている間に光を出すんです、ここでちよつとまごまごするんです。これは本当

ディスカッシ

です」と、チョークで黒板を叩きながら電子のまごまごしている姿を見せるつもりらしい。先生は「定常軌道の考え方からして、軌道の上で光を出しては困る。根本概念に矛盾するから」となかなか納得されない。するとT博士がのつそりと立ち上つて、「それは、そのう、電子が出る時にあるタンゼントを持つて出て行つて、ヘリックスかなんか描いて行くとすると、タンゼントの角によつてレも決まり、どの軌道へ行くかも決るとするとい理由ですが」といわれる。先生は「そんな人アーティファイシャル為的的な考えはどうも困る」となかなか頑強である。

この頃になつてみれば、このボーアの理論は今の量子力学などから見ると大変やさしいものになつてゐる。やがては今の量子力

学にも皆が馴れて、小学生がラヂオをいじるよう気に樂に親しまれる日がくるかも知れない。

先生が晩年書かれた「生命と割れ目」や「藤の実の研究」などの論文の題目だけ聞いておられる一部の読者は、先生は今のいわゆる「正統派」の物理学、すなわち相対論や原子論の方面には全く興味を持たれなかつたかのように思われるかも知れないが、実は決してそうではなかつた。相対論のやかましかつた頃は、「大學に籍がある以上は一通りは知つておらねばね」といいながら、

難しいラウエの本を読んでおられた。先生の「アインシュタインの側面觀」には、理論の内容のことはずつとも書かれていながら、その当時、我が国で相対論を十分理解しておられた少数の先生方

の一人であつたのである。その後原子論が物理学界の主潮となつてからは、先生はゾムマーフエルドの千頁に近いあの大著を読みながら、「一回ざつと読んで今二回目を半分ばかり読んでいる。なかなか面白いよ」といつておられた。そして理研のF君の帶スペクトルの講義を喜んで聞いておられた。先生が「電子と割れ目の類似」^{アナロジー}を書かれるにはちゃんと準備がしてあつたのである。

二、三年前のこと、割れ目の研究の生物学上における意義を論ぜられていた頃、理研の部屋へ伺った時には、机の上に細胞学の部厚な洋書が四冊ばかり載つていた。「これを皆読んだのだから、なかなか勉強だろう何理由はないよ」といつておられた。この調子だから、単なる奇想を堂々と発表する人があると、「出鱈目」

だといつて大変御機嫌が悪かつた。無理もないことである。

二三　本

本の話が出たことがあつた。

本は何といつても大家のものに限る。マクスウェルの電磁気とか、トムソン、テイトの物理教科書とかは、今頃の人にはほとんど読む人がないだろうが、閑があつたらぜひ読んで見給え。新しい整つた本よりも、あんな本の方がどれだけ役に立つか分らない。書いてある事は旧いし、今から見たら間違つていることもあるだろうが、ただ何となく、あれ位の大

家の書いた本には、インスピレーションがあるね。そこが一番大切なんだ。この頃出る色々のものから寄せ集めたような、書いている本人もよく分らぬような人の書いた本にはそれがないのだ。実際そのインスピレーションを得るというのが、本の一番大切な要素なんだ。

僕は大学の卒業前の正月休に、レイレーの音響学(サウンド)を持つて修善寺へ行つたことがあるがね。湯にはいってはレイレーを読み、湯にはいってはレイレーを読むという生活は実際に楽しかつたな。到頭二週間近くで全部読み上げてしまつたが、あれは後々まで随分役に立つたものだつた。この頃ラヂオの色々のものをみても、初めての配線(コンネクション)のものでも直ぐ分る

ね。みんなレイレーの音響学サウンドにあるものばかりだね。あの旧い音響学と最近のヴァルブでは大変の違ひのように見えるが、結局振動という一番大切な点では全く同じことだよ。

それから閑があつたら、大家のものでごく通俗なもので、知り抜いていることを書いた本も読んだ方が良い。そんなものを見ている間には、自分の頭に余裕があるから、きっと何かのヒントを得るものだ。特に実験を一所懸命やっている時に、そんな本を読むと、よく非常に大切なヒントを得ることがあるよ。その意味で、あまり実験ばかりやらぬいで、日々はうんと遊び給え。高い山へでも登つたり、温泉にでも浸つてゐる間に、ふつと丸でとんでもない新しいアイディアを

得ることがあるから。よく今の若い者は遊んでばかりいて困るといわれる先生もあるが、僕は、どうも今の若い者は勉強ばかりしていいかんといいたいね。

二四 露西亜語

先生が外国語に堪能だつた話は事新しくいうまでもない。普通書かれたのは英語が主であつたが、^{ドイツ}_{フランス}独逸語と仏蘭西語も自由であり、読むだけは伊太利語も^{ロシア}_{露西亜}露西亜語もかなり楽だつたようにみえた。「比較言語学に於ける統計的研究」を書かれた頃は、单語だけは十数か国語に相当通じておられた。英文は非常に立派な文章

を書かれ、英國の氣象台長シンプソン博士に会つた時にも、この英文は十分な高等教育を受けた英國紳士の書く文章だといつて驚いていたことがあつた。露西亞語に凝つておられた頃、今ツルゲネーフの『初恋』を読んでいるが、やはり原文の方が面白いなどといつておられたことがあつた。よく「露西亞語の論文で必要なのがあつたら僕の所へ持つてき給え、読んであげるから」と理研などでいつておられたことがあつたが、これは結局誰も持ち込まなかつたらしい。

露西亞語といえば面白い話がある。ある日角袖か刑事みたいな人が御宅へ調べにきたことがあつたそうである。先生の留守の時にきて女中さんをつかまえて色々根掘り葉掘りきいて行つたので

あるが、その中で、女中さんがちょっと「露西亞語の本なども御読みになるようです」といつたら、その男が、「やつぱりそうでしたか」といつていたそうであつた。

君、その時にね、その刑事が妙に声を落したそうだ。「やつぱりそうでしたか」は良かつたね。しかしあんな報告が基になつて、色々やられるんじや耐らないね。これは少しきだらぬことになりそุดだから、今度からは御免を蒙つた方が利口らしい。

どうも心なしか、露西亞語の方はその後はあまり吹聴されなくなつたようだつた。

二五 ある探偵事件

ある晩のこと、「僕は今日一つ探偵事件を解決したよ」と先生は上機嫌で話されたことがあった。それというのは、その日先生の御宅へ妙な私製葉書が舞い込んだのである。表にはちゃんと宛名が間違いなく書かれているのに、裏は真白なのであった。どうも悪戯にしてもあまり変なので、こういう場合先生は、いつか小宮さんがいわれたように、綜ての ポシビリティ 可能性を考えて見られるのが得意でもあり、また好きでもあつた。宛名の字の書き振りから見ると、どうもこの葉書は沢山同様な葉書を書いたものの一枚らしいという気がしたので、そうするとこれは印刷の葉書で、何かの

間違いで一枚だけ刷り落ちたものかも知れないということに気が付かれたそうであつた。それならばこの葉書の上に重つていたものが印刷された時の活字の圧力がこの葉書の上に残つているはずだと、色々の角度で光線を反射して見られると、どうも字の型らしい痕がある。さてこれをどうしたら読むことが出来るかと散々考えられた末、鉛筆の芯を細かい粉に削つてその葉書の上に散らし、それを指先でそつと撫で付けてみたら、字がありありと出てきたという話なのである。結局その葉書は何かの会の招待状か何かで大した必要のある葉書でもなかつたのであるが、先生は大分御得意のようであつた。

球皮事件の話にしても、この話にしても私が何よりも驚いたの

は先生の測り知るべからざる強い自信である。自分が考えたならば分らない事なら分らないが、分る事ならきっと分るはずだという自信がどこかに潜在意識として働いていたればこそ、一枚の真白な葉書にこれだけの脳力の消費が出来たのであろうと思われる。

先生は探偵小説が御好きでなかつたかという話を時々聞かれることがあるが、いつかちよつと伺つた時の話では、あまり興味を持つておられなかつたらしい。「探偵小説というものは、どれも皆つまらぬものばかりでね」という意味をもらされたことがあつた。しかしそれは今の普通の探偵小説ではきっと先生には絡^{からくり}繰^{くまぐり}があまり見え透くのでつまらないといわれるのだろうと思われる。五、六年前に札幌へこられた時にこんなことがあつた。一緒に学

校の構内を歩いていたら、鴉が一羽頭の上を飛び去つて、赤い血のようなものがついた布片を先生の眼の前に落して行つたことがあつた。その時先生は、「それは人間の血じやないかね、これだけを材料にしても立派な探偵小説が出来るな」といつてニヤリとされたことがあつた。

二六 赤い蛇腹の写真器

大正十四年の一月のある土曜日のことである。丁度その頃ある方面の委託実験が大分面白くなつて、先生もその時は珍しく興奮してその仕事に熱中させていたのであつたが、その仕事も大体の

見通しがついて幾分ホットした頃のことである。実験用に写真器のシャツターが一つ要るので、それを買いにA商店へ先生と皆で出掛けたという騒ぎなのである。今から考えてみると随分貧弱な話であるが、その頃はシャツターまで委託の研究費で先生御自身買いに出掛けられたものであつた。

朝その話があつて、午後になつてもまだ私とY君とは、その方面から借りた無電機のアンテナを雪の積つている屋上に張り廻していた。先生がのつそり屋上へ顔を出されて、「写真屋へはどうします、手が空いたら行きましょう。僕は下で校正をしているから、手が空き次第きてくれ給え」といつて寒むそうにして下りて行かれる。Y君は「やあ、先生珈琲^{コーヒー}がのめないかと思つて心配

しておられるぞ」と大急ぎで片付けてしまう。

それでは参りましょうという段になると、先生は例の微笑を浮べながら、同室のM君達に、「どうです、諸君も」と誘いかけられる。M君は生真面目な顔をして、バットの煙を濛々と揚げながらテレスコープにしがみ付いている。「今日は土曜だから、いいでしょう。あまりやつては神経衰弱になつてしまふ。写真屋で油を売るのも一つの勉強だから」と先生もちよつと持てあましの気味である。「おいよせよせM君、行こうや」とY君の助太刀でM君もようやく御輿をあげて、さて愈々四人で電車に乗り込むという騒ぎである。

A商店で問題のシャツターレを買うのは二、三分で済んでしまう。

すると先生はいつも持つて歩いておられる風呂敷包の中から、古色蒼然とした写真器を一つ取出されて、「この写真器は二十年も前に、^{ドイツ}独逸で買つてきたものだが、××センチに○○センチのフィルムでなくちやいけないのだ。ところがそれが今どこできいてみてもないから、何とか今買えるフィルムに合うように直して貰えないかな」と店員に渡される。若い店員はちよつと見て「これは三号のフィルムで合います」とまるでにべもなく言う。そして一番普通のイーストマンの巻フィルムを持つてくる。先生は少しいわれるが、店員は平氣でチャント嵌めてみせてしまう。

「なるほど変だね、そうか、やつぱり実物を持つてこなくちや駄

目だね。そんな位ならもつと早くからこの器械を利用すれば良かった。どうも、二十年もデイメンションばかりいつて探していたんだから、また諸君を喜ばせてしまつたな」と先生は頭を搔かれ。その写真器というのは蛇腹が赤いのだから益々変っている。

この赤い所がちよつと変っていますねと誰かが口を出すと、先生は「どうもこの蛇腹では大分軽蔑されるから、今度は一つ黒く塗つてしまふ」といいながら、その店員をつかまえて、「ところでね、君このシャツダーがちよつと妙でね、こう一々挺子てこで持ち上げるので不便なんだが、これを直して貰えないかな」と説明される。

店員は仔細らしくその写真器を調べている間に、先生は印画紙

の見本に掲げてある額を眺めておられる。図柄は石の階段を下から大写ししたものであつた。店員が「この写真器はもう旧いから誰かにおあげになつて、新しいのを御買いになつた方が御得でしょう」という結論に達した頃は、先生はもうその方へ返辞はされずに、

「君、あの階段の磨り減り方がプロバビリティ曲線カーブになつてゐるなあ」と額を指差しておられる。

「僕はN先生の洋行中、しばらく一般物理の講義を持つたことがあつたがね、助手に学生の出席時間をつけさせてみたら、やつぱりちゃんとプロバビリティ曲線カーブになつたから、早速講義の材料に使つたことがあつたよ」

と話をされていた。

帰りには果して予定通り珈琲コーヒーの御馳走になつた。

二七 ヴァイオリンの思い出

この話も一部は、隨筆にかかれているのであるが、御話の方が
もつと先生の プライベイト 私的な感情がはいっていると思われる所以書き

止めることとする。いつか、今は発狂して行衛が分らぬという噂
の〇君と二人で、先生の応接間へ御訪ねした時のことであつた。

まだセロの勉強の始まる前で、先生はヴァイオリンに大分御熱心
だつた頃の話である。

僕のヴァアイオリンも古いものだ。竜田山の頂上へ持ち上つた時から、もう二十年あまりになるからなあ。あの時狸か何かが鳴いて逃げ帰つたというのは、あれは嘘だが、竜田山へ上つたことは本当だ。何でもあの時買ったヴァアイオリンは九円だつたが、月々十二円ずつ送つて貰つていたのだから、その借金を返してしまには、何でも随分かかったものだつた。そのヴァアイオリンを担いで東京へきて、一つ誰か先生について勉強しようと思つて考えて見たが、なかなか見当らぬ。到頭思い切つてケーベル先生の所へ出かけて行つたものだ。話の方は、僕の拙い英語と、先生の拙い英語で丁度よかつたが、今から考えてみると實に変なことをしたものだ。一度も会つ

たことのないケーベル先生の所へ突然出かけて行つて、ヴァイオリンの先生を紹介してくれといつたのだからね。もつともケーベル先生という方が、そんな人なんだ。初めて会つてヴァイオリンの先生の紹介を頼んでも良いような気がした人なんだ。

到頭先生紹介状を書いて音楽学校の先生か誰かに紹介してくれたが、一体いくらのヴァイオリンなんだというので、

『nine yen』 などと、ケーベル先生ぶーっと吹き出してしまつてね。一体外国人が人の前で大声で笑うということは滅多にないことなんだから、あの時ばかりはよほどおかしかつたとみてね、なかなか笑い止まなかつたよ。

それからその先生の所へ行つたが、今から考えてみると誰が知りもせぬ学生に教えてくれるものかね。しかしその頃はちつとも知らなかつたから、喜んで出かけて行つてみると、それは音楽学校の教習場があるから、そこへ通えといわれたのさ。僕は忙しくてとてもそんな所へ出かける理由には行かぬというと、兎に角非常に忙しいからとても教えられないと体よく断られてしまつた。それで先生につくことはオジヤンになつてしまつて、独りで勝手に弾いていたものだつた。

この頃直ぐ近所に先生があるので、そこへ通つてゐるが、また全然初めからやり直しさ。弓の使い方なんか、ちつとも氣にも懸けていなかつたが、やつぱり先生についてみると違

うね。この頃は、「少しヴァイオリンらしい音が出ますね」などと御世辞をいつて貰つて、上機嫌になつてゐるところさ。
どうも先生の所へ行くと、十五、六位の子供がきていてね、それと一緒に教わるのは初めは随分気まりが悪かつたよ。この頃はそんなでもなくなつたが。もつとも先生もね、僕みたいな年寄りが、子供の前で顔をしかめてやるのが氣の毒だと思つてか、僕の番になると、奥の室へ連れて行つて、一人だけ別の室でやつてくれるよ。それでも待つてゐる間は、そんな子供達と一緒に腰を掛けているのだよ。なかなか勤勉なものさ。

二八 排日問題

先生の憂国の真情には頭が下るとは、吾々腕白仲間の間にも定評のあることである。その頃、排日問題が大分騒がれたのであるが、滅多に時事問題などを少くとも吾々に対しては口にされなかつた先生も、排日問題については、真顔になつて論ぜられたものであつた。

民族の独立だな。永久に溶け合うことの出来ぬ黄色人種と白色人種との争いを解決するには、民族の文化上の独立が必要だ。まず日本のような国では、偉大なる学者の出現によつて、日本民族自身の価値と存在意義とを世界に示すのが近道

だ。国の価値とその存立の意義とを深く白色人種の脳裡に刻み込まねばならない。それが日本を救う唯一の道だ。排日なんか桐の一葉だよ。やがては天下の秋がくることを覚悟していなければならぬ。

僕がこんな気焰を揚げるのは、君達の頭の中に種を蒔いておきたいからだ、僕にはとても出来んから、君達機会のあるごとに天下の青年に叱呼してやり給え。中学位の連中に吹き込んでおくと、存外効目があるかも知れないな。

ケマル・パシヤなんか偉いものだ。いつの世になつても英雄は絶えないな。事なきれ主義は止めてしまつて、消極的な道徳なんか蹴飛ばしてしまつて、積極的の道徳に入らねばいか

んな。親に孝行だの、家庭の不和だのみんな瑣々たる問題だ。
もつとも消極の方は皆失敬してしまつて、積極的の方はや
らないとなつたら、こりや論外だがね。

二九　日本の商人

日本の色々の商売をしている人が、どうしてあんなに進歩
しないのか、不思議な位だ。蓄音機なんか特に著しいな。ち
よつとした事で良いのだが、一週間に一つずつでも、どんな
つまらぬ事でも気に留めて改良して行く気になれば決してあ
んなものにはならぬはずだ。金がなくて科学的研究は出来

ませんなどといつてゐるが、決して金がないのじやない。考え方がないのだ。考えて生活するという余裕がまだ日本人にはないのだな。実際科学的にやるというと、直ぐコンクリートの建物を建てて、実験室を作つてという風に考へるのだから、これは一つは吾々物理学者の責任なんだな。科学的にやるという意味を分らすことはまず今の所では到底出来んな。印刷屋でもね、毎日一つずつ活字の型を改良して行つても、すぐ立派なものになつてしまふがな。そして結局その方が勝つものだがね。もつともこれは實際はなかなか難しいことなんだ。

三〇 落第

少し話が内輪話のようになるが、ある晩先生がひどく懐古的な話をされたので、私もつい高等学校の入学試験に落第して、一年家で商売の手伝いをしたことがあるという話をした。そしたら先生が、「それはよいことをした。そういう経験は世の中を知る上において滅多にない良い経験だ。一年位大学を遅く出るということは一生のことを考えて見るとちつとも損にはならない」と妙に力瘤を入れて落第を礼讃された。そして声を潜めるようにして、

実は僕も中学の入学試験に落第したことがあるんだ。小学校の時、なまじつか出来るなんて慢心して碌々準備をしなか

つたものだから、良い懲しめになつた。それで慌ててね、一所懸命勉強して次の年成績が良かつたもので、中学の二年の補欠試験を受けてどうにかパスしたので、年の上では損はしなかつたが、立派な落第さ。しかしあの時の経験は実に貴かつたと今でも思つてゐる。その中学には色々面白い先生がいてね、溝淵さんなんかもいたんだ。若くて先生というより兄さんというような気がしていたものだ。溝淵さんからは随分色々ハイカラな事を仕込まれたものだつた。

私はびっくりして、「溝淵先生がハイカラだつたんですか」と聞いたら、「何、思想上のハイカラさ」といつて大笑いをされた。それから高等学校は五高だつたが、五高にも良い先生が沢

山おられたものだつた。夏目先生に英語を教わり、田丸先生に三角を教わつたものだ。田丸先生に教わると三角が生きてくるのだから妙だ。数学は子供の時から嫌いだつたのが、あの時初めて面白いと思つた。それまで二部の工科だつたのを田丸先生の感化で到頭三年の時理科に変つてしまつたんだ。

理科の独逸語ドイツは青木さんだつたが、生徒は僕と木下さん

（木下季吉先生）とそれから農科を出て今局長になつてる男と三人切りだつた。そして一人休むと今日は三分の一欠席していますから御話にして下さいなどといつていたものだよ。

三一 中学時代の先生達

中学の先生には愉快な人が多かつた。英語の先生にアメリカに十年もいた人がいて始終教員室から、帽子をかぶつて外套を着て教室へやつてくるんだ。そして講義が済むとまた帽子をかぶつて教員室へ帰つて行くというのだから変つていたね。その先生にパラフレーズを随分ひどくやらされたものだが、今になつてそれが随分役に立つてゐるよ。何にしても、遊廓へ行つて、そこから朝黄八丈のどてらに靴をはいて学校へ出てきたという噂があつた位だから、随分変つていたね。何でも後にはタイムスの記者になつたという話だつたが。

それから漢文の先生にも面白い老人がいてね。何か話をし

て下さい」というと、それじゃ子供の出来る話をしてやるといつて、漢法の古い解剖図を黒板一杯に描いて説明してくれたものだつた。愉快な先生で四書位ちゃんと本文も註も全部暗記していて、本を持つて講義したことなんか一遍もないんだ。いつか子供の出来る話をしている最中に、校長さんが見廻りにきても平氣で続けていたことがあつたよ。

作文の先生にこんな人がいたね。黒板一杯に南画の山水を描いて、唐人が杖を曳いて橋の上を渡つて行く画を描いて、今日はこれについて作文を作れといつて平氣なものだつた。それからある時なんか、「ある男が野原で便所へ行きたくなつたので、そこで用を弁じてしまつた。そして弁当を喰おう

と思つて握り飯を取り出したら、蜂か何かきて慌てて、その握り飯をその大便の上に落してしまつたんだ。そこでその男が、こいつあるほど早道だといった」という話をして、

「さあ今の話を漢語交りの作文に直してみろ」といつて済ましていたものだつた。勿論便所へ行きたくなつたなどという難しい漢語はちゃんと教えてくれたが、今でも妙にその言葉だけは覚えているよ。「内逼る」というのだ。

兎に角と
かく、今になつて考えてみると、そんな先生方から一番多く何物かを教わつてきたという気がするな。実際師範学校を出た先生に小学校で教わり、高等師範を出た先生に中学を教わる今の子供達は不幸だなあと思うこともあるよ。こんな

ことをいうとまた、寺田はひねくれたことをいうといわれる
かも知れないが。

この話も後で先生が隨筆に書かれたことがあるかも知れないと
思つて、矢島氏に問い合わせて見たら、隨筆には書かれていないが、
ノートの中に、中学時代の先生の列伝とだけ一行書かれたものが
あつた由である。いずれ何かの機会に書かれるつもりだつたのが、
そのままになつたものと思われる。ここで先生の現代のいわゆる
整頓した教育制度に対する御意見を聞く機会を逸したことは誠に
残念である。

三二　冬彦の語源

先生の筆名、吉村冬彦の語源は、この月報に前に矢島氏が多分こうだろうと考証をされたが、その通りであつて、全く同じ意味のことを行に先生から伺つたことがある。

僕の家の先祖は吉村という姓だつたので、それに僕が冬生れた男だから、吉村冬彦としたわけさ。だからこの名はペンネームというより、むしろ僕は一つの本名だと思つているのだ。この頃の人は本名で何でもどんどん書くが、僕らの若い頃は、何となく周囲が怖いような気がして、とても寺田寅彦で堂々とあんなものを書くことは出来なかつたものだよ。まあこんな道楽のことはどうでも良いとして、実験でも随分気

兼ねばかりしてやつてきたものだ。僕はしかしあんまり周囲に気を配り過ぎたような気がする。古ぼけた器械ばかり持ち出して、変な実験をやつて途方もない理論をそれにくつづけるばかりが僕の本当の希望ではなかつたのだが。今理研におられる先生方が大学で実験をしておられた頃は、電気なんかの新しい流行の実験をすると、直ぐ蓄電池のパワーが足りなくなるし、器械を買つて貰うのも大変だつたし、遠慮ばかりしている中に、到頭物理の方まで、吉村冬彦になつてしまつたんだよ。

三三　油絵の話

あの頃先生の御弟子達の中で油絵を始めるのが流行つたことがあつた。ことの起りは今理研にいるS君が、先年油絵を始めたいと先生に話したら、それじや僕が手ほどきをしてやろうということになつて、S君を引っ張つて神田の文房堂へつれて行つて、一々説明をしながら必要なものを一通り揃えて下さつたのである。そして帰りに風月へ行つて珈琲^{コーヒー}の御馳走まであつたというので、皆を羨しがらせたものであつた。

ある晩先生の応接間へ伺つたら、S君が油絵を持つてきていた。それを椅子の上に立てかけて、先生が一々丁寧に批評をしておられる。色の使い方、構図の取り方から、細かい技巧の点まで實に

懇切を極めた説明があつて、画の心得の話になる。

空は青、樹は緑と思つて画をかいてはいけない。その点物理の研究と同じだよ。そういう先入主を離れて樹を見ると、樹は決して緑じやない。陽の当つている所は黄色、蔭の所は青か赤だよ。緑はその間にちよつと出でているばかりなんだ。よく考えてみればそのはずだろう。そしてよく注意して見て、その色を大胆に使わぬと画にならぬ。シーツが白いと思つて、白く描くとどうしても白く見えぬ。それでは描いたものになつてしまふ。本当の白いシーツは赤や黄で描いて初めて出せることが非常に多い。その積りで一度白いシーツを見てみ給え。きっと驚くから。

しかしそんなことにあまり拘泥すると美術学校の落第生のような画になつてしまふ。ところがまた全然そんなことを考へないと本当の画の面白さが分らない。そこがむつかしい処だよ。まあそれだけ見えるようになつたら描くんだな。見えたぬものを描いちやいかん。腹にないことはせぬ方が良い。素人の画は何となく拙いが、嫌味がなくて風韻のあるのが良いので、何でもあまり上手になつたら素人の芸はおしまいだね。画ばかりでなく、音楽でも何でもそうだ。田丸先生がよく、昔ニウトン祭の時独唱をされたが、先生のは實に感服する。決して上手ではなく、自分でも上手でないことは知つておられたが、上手でない者が一所懸命やる所が素人の芸の尊い所

だということを自覚して一心になつてやられるんだ。いかにも田丸先生らしい。あれでなくちや駄目だよ。夏目先生の画でも、確かにそんな所があつたものだ。

実は僕はこの頃画の先生の所へも通つているんだがね。この夏は到頭モデルまで描いたよ。こうなつちや、あんまり道楽者のように思われて困るのだが、僕にはどうもヴィタミンがなくちや生きて行けないんだから仕方がない。

先生はちよつと気まりの悪そうな笑いをされる。S君が「ヴィタミンにもA B C D……と沢山あるですから」というと、「どうも今の若い人は口が悪くてかなわんよ」と苦笑しておられた。

三四 学士院会員

先生が学士院会員になられた時は、最年少の会員だと新聞に書かれてあつた。丁度その日、実験室へ見えた時に、皆で御祝いをいつたら、「どうも未だ若い氣でいるのに、到頭あんなものにされちゃつたよ。今日も御殿で末広君に会つたら、愈々君も老大家の域にはいつたのだから自重せにやいかんよと冷かされたので悲観している所なんだ。」という話であつた。「先生は地球物理の方で会員になられたのですから、その方はもう大家になつたが、物理の方はこれからだとおっしゃれば良かつたのですに」といつたら、「それは巧い。今度末広君に会つたら早速敵をとつてやろ

う。うんそれに限る」と大機嫌で帰つて行かれた。

三五 恐縮された話

Y君と一緒に実験をしていた頃の話である。四月の休みにY君は郷里へ帰つて少し帰京が遅れたことがあつた。先生から何か新しい実験の装置のことできよつと相談したいから、Y君が帰つたら直ぐ会いたいといつてくれ給えと言い付けられたことがあつた。それでその由をちよつとY君の家へ電話で伝えたところが、大変な騒ぎになつてしまつたのだそうである。翌日の午後飛んで帰ってきたY君の話によると、何でも家から「テラダシキキヨウマツ

スクカヘレ」という電報が郷里へ行つて、それが丁度Y君が親類の結婚披露とかの席に列つている所へ配達され、それという勢いでY君は今朝の三時に起きて一番で帰ってきたという話なのである。

その話を次の土曜の晩先生の応接間へ伺つた時ちよつとしたら、先生はまるで小娘のように真赤になつてひどく恐縮されたのでかえつて弱つてしまつた。「それは困つた、僕はそういう意味でいつたのではない」と何遍も繰り返しながら、もう一つ恐縮された話をされた。

僕はこんなに恐縮するような目に遭つたのはこれで二度目だ。もう大分前の話だが、Wさんと一緒にマグネットの長さ

をミクロンまで測っていたことがあつたが、ある時Wさんが
ちよつと出張か何かでどこかへ出掛けたことがあつたんだ。
ところがその晩十二時頃になつて、僕の家の門を叩く人があ
つて、起きてみるとWさんが門の前に立つてゐるんだ。そし
て「実は国府津まで行つたんだが、あの原器室の入口の鍵を
忘れて持つて行つてしまつたので、急に返しにきたよ」とい
つて鍵を出された。あの時ばかりは流石さすがの僕も恐縮の極み冷
汗が出たよ。あんなに弱つたことはなかつたね。僕は今は御
覧の通り出来るだけぼらにやつてゐるが、これでも若い時
は薬瓶を提げて我慢しながら学校へ通つたものだつた。僕も
本当は几帳面なのが好きなんで、自分も身体の良かつた中は

出来るだけちゃんとやつてきた心算だったが、とてもWさんには敵わないね。几帳面もあれ位になると雅味が出てくるよ。もつともあの時は心底から恐縮してしまつて雅味どころの騒ぎではなかつたがね。

三六 昼寄席

この話は先生の大学時代から学校を卒業されて間もない頃の、先生の御家庭の事情などがそのまま出ていているので、書かない方が良いかとも思われるのであるが、これらの話は断片的には先生御自身で所々に書かれていることであるし、また先生は、夏目先生

の資料を早く集めておいた方が良いということを話され、その時、どんなことでも材料は全部集めておいた方が、後に夏目先生を研究する人には大切な資料になるのだからと話しておられたことを思い出したので、書き止めておくことにする。

僕が初めて東京へ出てきた時は、銀座の商店に親類があつたもので、そこから学校へ通つたのだ。そこの息子というのが遊び人でね、よく昼寄席なんかへ連れて行つてくれたものだつた。その頃の昼寄席ときたら實に呑気なもので、大抵は広い客席にバラバラ位しか客がいなくて、それが皆話をききに行くのではなくて、昼寝をしに行くのだね。みんな浴衣掛けで団扇を持つてねているんだ。中にはグーグーいびきをか

いているのもいる。それでも若い男が高座で何か一所懸命に語つているのだ。どうも今の世の中には到底存在の許されそ
うもない呑氣なものだつた。その親類の家というのが天金の
裏でね、時々天ぷらをとつて御馳走をしてくれたことがあつ
たつけ。

それからそこはどうもやかましいので、またその親類のお
やじに頼んだら、谷中の御寺を探してくれてね。何でも古い
汚い御寺だつたよ。本堂の裏が寄宿舎のようになつていて、
美術学校の生徒などに間貸しをしていたものだつた。僕は仏
壇の直ぐ横で、随分暗い不衛生な所だつたよ。何であんな所
をわざわざ探してくれたのか、大学の前には立派な下宿屋が

沢山あつたのにと、今思つてみると、癪に障る位だが、あの頃は僕は、何でもいわれるままにきいているべきものと思つていた。毎日々々精進料理ばかりで我慢していたものだつた。何でも東京は悪友が多いからとでもいうので、わざわざあんな所を選んだものだろうと思う。

美術学校の連中は、本箱に本なんか一冊もなくて、その中に鍋やら丂やらを放り込んで自炊をしていた。日曜の朝なんか遊びに行くと、よく枕の上に頤あごをのせて床の中で新聞を読んだりしていたものだつた。あの連中の生活ときたら実際羨しい位呑氣なものだつた。

その寺の坊主といつたら、實に変な坊主で、ある晩遅く、

いろいろの横で何やらこそそやつていて、何思わず行つてみたら、暗いランプの下で五十錢銀貨を山のように積んで勘定をしているんだ。あの時は實にゾーツとしたよ。

それから國から妻と母がきてね。僕は高等学校時代に妻帶していたんだ。身体が弱かつたし、一人息子だつたもので、親が心配して無理に貰つてしまつたんだ。それでまた家を探して貰つたら、今度は藍染町の汚い小路の離れを借りてくれたんだがね、そこがまた實際不衛生極まる所だつたよ。それから仲御徒町の金貸しのばあさんの離れを借りたり、隨分流浪の生活をしたものだ。それがようやく今の坂井さんの前の家があいて、それに引越してやつと山の手の生活に入つたと

思つた矢先、妻が病氣で死んでしまつたのだ。實際、何故あんな不衛生ないやな所ばかり流浪して歩いていたものか、今思うと腹が立つ位だ。随分永らくあの前を通るといやな感じがしたが、この頃やつと平気になれるようになつた。

それから僕も病氣になつて、学校を休んで国へ帰つて一年近くも海岸で暮したものだ。その間には随分面白いこともあつた。案外ローマンス位あつたかも知れないよ。

いつもなら、こんな所で機嫌の良い微笑が出る所であるが、この時ばかりはいかにも淋しそうな笑いであつた。

三七 僕が死んだら

いつかこんな妙なことを先生は冗談らしく、いつておられたことがあつた。

僕は今一番読んでみたいと思うのは、僕が死んだら、皆が僕のことをどういう風に書くだろうということだ。君、何かそれを読むような巧い方法がないだろうか。どうだろうこれは、上海かどこかへ行つて、隠れてしまうんだ。そして日本へは自殺したとか何とか電報を打たせて、半年位支那のどこかに隠れていて、こつそり帰つてくるという案は、もつとも駄目かね。屍体が見付からなかつたら、皆が安心して書かないかな。

どうもひどく冗談らしい中に、どこかひどく真剣なような所があつて、どうとも返事に困つてしまつた。

（昭和十二年六月『寅彦研究』）

青空文庫情報

底本：「中谷宇吉郎集 第一巻」岩波書店

2000（平成12）年10月5日第1刷発行

底本の親本：「冬の華」岩波書店

1938（昭和13）年9月10日

初出：一～四「寺田寅彦全集 第六巻 寅彦研究第三号」岩波書
店

1936（昭和11）年11月27日刊

五～九「寺田寅彦全集 第九巻 寅彦研究第四号」岩波書

1937（昭和12）年1月1日刊

一〇〇一六「寺田寅彦全集 第十一卷 寅彦研究第五号」

岩波書店

1937（昭和12）年2月7日刊

一七〇一「寺田寅彦全集 第二卷 寅彦研究第六号」岩

波書店

1937（昭和12）年3月1日刊

一一一～一五「寺田寅彦全集 第八卷 寅彦研究第七号」岩

波書店

1937（昭和12）年4月1日刊

一六一～三一「寺田寅彦全集 第十四卷 寅彦研究第八号」

岩波書店

1937（昭和12）年5月13日刊

一一一～三七 「寺田寅彦全集 第三卷 寅彦研究第九号」 岩
波書店

1937（昭和12）年6月5日刊

※中見出し「一四 露西亞語」の初出時の表題は「唯物論研究」
です。

入力：kompass

校正：岡村和彦

2019年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

先生を囮る話

中谷宇吉郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>